

評価委員 巷野悟郎

(こどもの城・小児保健部長)

小児は成長・発達していく力をもってはいるけれど、そこに適切な環境がなければ、目覚ましい成人へ発育していくことが出来ない。即ち最も身近で育てる母親、父親、きょうだい、そして子どもを取り巻く家庭環境と、更にその人達が生活する地域環境が、望ましいものでなければならない。しかし現在子ども達の育成する過程で、その環境は必ずしも恵まれた状態ではない。それは目まぐるしく変わりつつある環境のなかで、直接或いは間接に小児の発育を阻害する要因が作り出されてきているからである。生まれ出る子どもは昔も今も変わらないけれど、それから後の環境に問題があるとするならば、それらを分析して対策を考えるのが急務である。

「地域・家庭環境の小児に対する影響等について」という基本的研究課題も2年目を迎えて、今回の研究報告会の内容は充実してきた。私は午後の部からの報告会に参加したので、演題11以降の発表内容について感想を述べたい。

環境の変化は先天異常の発生に影響を及ぼす。そして有機水銀による水俣病、PCB中毒など、限られた地域での環境汚染が、先天異常を発生させているが、地球規模で考えたとき放射能やその他による大気汚染も、先天異常発生に影響なしとはしない。従って先天異常発生の状況を定期的に観察することによって、環境の異常を察知することが出来よう。そしてそれは次の段階で先天異常発生予防につながるのである。このようなことから、我が国で行われている先天異常モニタリングも15年目を迎え、今回は芦沢氏が日赤産院での調査結果を報告している。更に煙草の本数と先天異常発生との関係など、ケースコントロールの研究を報告している。更に三好氏は、日本母性保護医協会の代表奇形のモニタリングの結果を報告している。各県5病院以上で、全国270病院の協力によって、1972年から1989年までの出産数221万人に対して0.83%の発生の奇形を分析している。このような研究は多くの施設が協力し、しかも統一された診断基準によって、確実に網羅しなければならないということが条件になるので、長い年月と研究協力者の体制が必要である。その点、日赤や日母での観察は貴重であり、これからも長く続けられていくべきであろう。そしてこのような領域の関心が、先天異常の研究を進歩させてきた結果、住吉氏によれば出生後の奇形の診断は、妊娠中にさかのぼってきて、妊娠中に奇形を発見した率は昭和61年に21%であったのが、最近30%に上昇してきたと言う。超音波診断が普及してきたためであろう。そして無脳症の31.3%が、妊娠中に診断されている。

このような結果が、今後は先天異常の発生の予防に発展していくことを期待したい。またそのときの意見として、欧米では生後1年まで、先天異常発見のための追跡調査が行われているが、わが国でも出生直後だけでは内臓奇形存在の有無が診断出来ないことがあるので、1年間は追跡していかなければならないとの発言は貴重であった。

岡氏を中心とした小児の健康と養育に関する研究は、家庭環境での今日的な問題を捉えて研究をすすめている。

辻氏は、全国調査で虐待児症候群231例を集めている。これらの症例は、全国の小児科医の協力によるものであって、かなり細かく分析されている。虐待児が双生児や未熟児に多いということは、注目すべきであろう。その他家族関係等について分析している。次の藪内氏(代小林)の報告のように、虐待児を早期発見、援助するためには、先ず事例を分析していく研究を積み重ねていくことが必要であるということは十分に理解される。

高橋氏は、父親の役割については父親の育児参加の場面を縦断的に観察し、研究していく必要があると述べている。少産と核家族、更に孤立した家庭環境では父親の役割は大きいであろう。この分野での研究や実践が望まれる。

高野氏は母と子の教室のプログラムをつくるために、数か所で実践し研究している。親同士がお互いに疎遠になってきている環境では、育児そのものも孤立するであろう。そこで親同士が気楽にお付き合いが出来ようになれば、それは直接子育ての自信にも発展するであろう。お互いを結びつけてあげなければならない時代になったのである。母と子の教室が、全国に展開されることを期待したい。

岡氏は子どもと親、子どもと保母等のかかわり、ひずみについて分析している。かかわりの内容はそれこそ無限であるが、岡氏は長い研究のなかで整理し、まとめている。岡研究班の基本的な分野である。今後の発展を期待したい。

先天異常の問題にしても、小児の養育の問題にしても、これらは移り変わっていく世の中の環境のなかで、常に最先端の情報をもとに分析していかなければならない領域である。しかも今日の研究の結果は、数年後には環境の変化によってその価値は変わるであろう。今回報告されたような研究は、将来にむかって絶えず続いているなければならないと思う。それだけに今回の研究結果は貴重なものであり、その一部でも直ちに実践にうつされていくべきであろう。